



本当のところ教えて！

放射線のリスク

放射線影響研究者からのメッセージ

日本放射線影響学会 編



本書は、日本放射線影響学会に所属する研究者が、放射線影響について“分かりやすさと科学性を両立できる簡潔な書籍”を目指して作成された本です。文字は大きめで、比較的短時間で読める分量となっています。

本書は3章から構成されています。“解説編”“放射線影響 Q&A”“市民と研究者の座談会から”と内容がそれぞれの章で完結しており、興味のある章から読むことができます。

第1章は放射線が人体に与える影響についての解説です。本章の特徴は内容の一貫性と分かりやすさです。放射線と発がんとの関係についての解説を軸としており、放射線の単位や種類の説明は最低限にとどめる一方、発がんについての分子生物学的な説明や、がん死亡における放射線とほかの因子とのリスクの比較、低線量放射線被ばくによる発がんリスクなどに紙面を割いています。また、例えばDNA修復の説明ではタンパク質名を挙げるのではなく“遺伝情報が書かれた巻物”と“筆記用具”の例えを使ってその概念を伝えるといった、専門外の人に要点を伝える工夫がされています。さらに、被ばくと子供は大人よりがんになりやすいのか？ 放射能測定における検出限界以下とはゼロを意味するのか？ といった点にも触れ、放射線被ばくについての理解を深められるようになっています。引用さ

れているデータは新しいものが多く、放射線教育に携わる方にとって参考となる資料と思われます。

第2章では、2011年の福島第一原子力発電所事故後に日本放射線影響学会が学会ホームページで回答してきた様々な質問から19件が選ばれ、質問と回答が掲載されています。“放射性物質汚染と健康影響について”や“放射線被ばくの種類と除染について”に関する質問などが掲載されており、第1章で述べられていない情報や、被ばくによる健康への影響をどのように評価するべきかなどが書かれています。

第3章は、研究者10名と福島県の市民代表者2名による座談会形式となっており、本書の3分の1強のスペースが割かれています。日本放射線影響学会のホームページによると、学会員の先生方は2011年以降市民向けの対話型講演会を数多く行っており、座談会にはそこで講演を行った先生が多く参加されています。原発事故後どのように行動したか、から始まり、苦勞した点や行動を通して感じたことなどが語られています。また、事故後浮かび上がった様々な問題（どこまで、どのように研究者が情報発信するべきか、もし研究者以外ならどこから発信するのが良いか、政府の対応について、等）が提起され議論が行われています。

座談会の中で印象に残ったものの1つに「リスクコミュニケーションは通常の学会発表や講演と違うことを意識した方がよい」という意見がありました。放射線影響以外の分野でも理系研究者がリスクコミュニケーションに関わる状況はあると思われます。その際どのように専門外の人々と意思疎通を図っていくかについて考えることが、今後の重要な課題であると感じました。また、市民向けの講演会に関わった先生が「講演では“安全とか危険”とは言わずリスクの概念を伝える方針を貫いた」ということを述べられていました。実際、第2章のQ&Aでは、「〇〇しても大丈夫ですか？」「〇〇は健康に影響ありますか？」という質問があり、それに対する回答は基本的にはこの方針で行われています。研究者が一般市民へ情報発信する際の参考になるのではないのでしょうか。

序章で著者は、「事故から4年を迎えようとする今となっては、情報が最も必要とされていた時期を逸

した感は否めないかもしれません。」と記しています。しかし、放射線についての理解を深めるための教育は今後も重要であり、特に若い人たちへの教育の重要性は第3章で座談会に参加された多くの先生が指摘しているところです。放射線教育に携わる関係者や放射線の人体への影響についての理解を深めたい方には、本書は役立つ1冊となるでしょう。

(齋藤祥子 筑波大学医学医療系)

(ISBN978-4-86003-454-2, A5判 140頁, 定価本体1,800円, 医療科学社, ☎03-3818-9821, 2015年)

☺ 会員係よりお願い ☺

Isotope News や RADIOISOTOPES の送り先、勤務先などが変わった場合は

メール、Fax、ハガキ等でご連絡ください

▷▷総務課会員係

☎113-8941 東京都文京区本駒込2-28-45

☎03-5395-8021 Fax 03-5395-8051

E-mail kaiin@jrias.or.jp

..... 会員番号をお忘れなく



移りゆく薬草の風景

第29回 クコ

鈴木 達彦

クコは古くから滋養がとれ、不老長寿をもたらす生薬として利用されてきました。漢方薬として用いられる以外にも、薬膳料理によく使われるのは小さな赤い実をしたクコの実ですが、杏仁豆腐の上に何粒か赤い実が添えられていることをご存知の方も多いでしょう。

クコはナス科の木本植物で高さ1~2mほどの細い木質の茎を伸ばします。少ししだれた枝が多数に枝分かれして叢生していることが多いです。ところどころに枝が変化したとげを付けています。紫色の小さな花を付けた後、お馴染みの赤い実を結びます。これを生薬としては枸杞子^{こっし}と呼び、高血圧肝疾患など、滋養強壮薬として用います。焼酎などに漬けて枸杞子酒を作り、手軽に利



用する方法もとられています。また、クコは果実以外にも様々な部分を生薬として用います。葉は枸杞葉^{こっし}と称し健康茶として利用されます。なかでも根の皮は地骨皮^{じこっぴ}と称され、漢方処方にも配合されます。地骨皮は強壮解熱薬となり、民間薬的には糖尿病に用いられました。そのほか排尿困難などに用いられる清心蓮子飲や慢性的な咳や痰に適用的な滋陰至宝湯に配合されます。

(帝京平成大学)